

## フランチェスコ・ボッロミーニによるローマのオラトリオ会における ヴァッリチェッリアーナ図書館の計画に関する考察

岩谷 洋子\*

### A Study of Francesco Borromini's Project for the Vallicelliana Library in the Roman Oratory

Yoko IWAYA\*

#### Abstract

Francesco Borromini, one of the three greatest architects of Roman Baroque period in the 17th century, realized a luxurious and ingenious large space of the Vallicella Library in the institute of the Congregation of the Oratory. It responded to the idea of the Oratorians', an open and public library that accepts all visitors seeking knowledge. For visitors, Borromini arranged available reading rooms to study freely, considering their use of terraces. Not only for visitors' convenience but also for the Oratorians' in order not to disturb the private life, Borromini carefully examined the vertical and horizontal movement and the plans of the library and each room related to it.

For the preacher as a guest staying in the building for a certain period, Borromini also made him easy to use the library, secured a flow line that did not intersect with the area of the Oratorians' rooms, and arranged his rooms.

As a symbol of the Congregation of the Oratory of a high intellectual level, and with a huge collection of books, Borromini creates a spacious view in the decorative and impressive main room of the library surrounded only by book shelves equipped a book table.

#### 1. はじめに

17世紀ローマのバロック期における建築家の三大巨匠<sup>1)</sup>の一人フランチェスコ・ボッロミーニ Francesco Borromini (1599-1667年)は、1637年から1650年代初めにかけて<sup>2)</sup>、ローマのオラトリオ会<sup>3)</sup> Congregazione dell'Oratorio a Romaのために、オラトリオや大食堂・調理場・休憩室・居室などを含む施設全体の計画に携

わった【Fig. 1】。この15年ほどの期間は、1629年に独立したボッロミーニが、サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ修道院などの経験を積み、建築家として熟達する期間に相当し<sup>4)</sup>、オラトリオ会の大規模な建築の至る所に、ボッロミーニの独創的なデザインが認められる<sup>5)</sup>。

なかでも、オラトリオ会の図書館【Fig. 2】は、

\*駒沢女子大学 非常勤講師

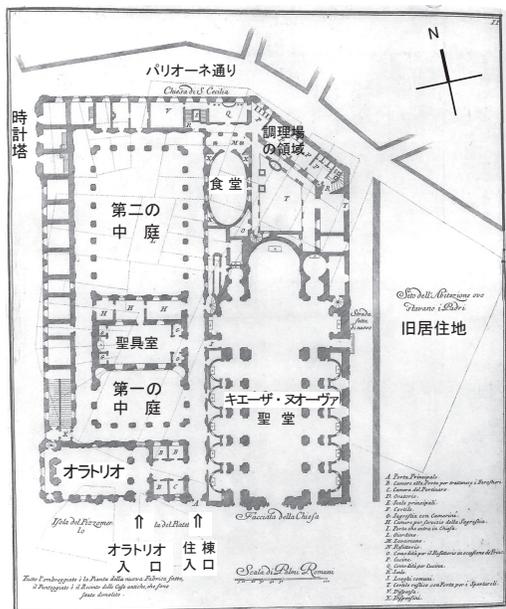


Fig. 1 ローマにおけるオラトリオ会の教会堂・施設の全体図 地上階 セバスティアーノ・ジャンニーニ『オプス・アルキテクトニクム』ローマ（1725年）tav. 2.



Fig. 2 オラトリオ会のヴァッリチェッリアーナ図書館（ローマ、1642年）

豪華で印象的な大空間や個性的な各部の表現<sup>6)</sup>だけでなく、膨大な数の書籍の管理・利用方法を考案した、機能上の計画における工夫もまた、注目に値する<sup>7)</sup>。特に、その際、ボッロミーニは、オラトリオ会が所有する蔵書を、広く公の利用に役立てたいという会士たちの要望に対応させようと、努めなければならなかった。

オラトリオ会の図書館の起源は、1581年、ポルトガル人の人文主義者で、文筆家のアキッレ・スタツィオ Achille Stazio (1524-1581年)から、その貴重な多くの蔵書を遺贈された時点まで遡る<sup>8)</sup>。当時のオラトリオ会は、1575年に教皇グレゴリウス13世（在位 1572-1585年）から、ナヴォーナ広場近くに建つ小規模なサンタ・マリア・イン・ヴァッリチェッラ聖堂を与えられて、その再建に取りかかり、建設活動の最も初期的な段階にあった。スタツィオからの遺贈から一貫して、オラトリオ会はその遺言に従い、知識を求める外来者を、広く受け入れる図書館であることを理念としてきた。

一般に、修道会は、世俗に対して閉ざされた集団社会を形成しているイメージであるが、公に対して広く知識を提供しようとする運営方針の図書館は、既にルネサンス期において、フィレンツェのサン・マルコ修道院の中に実現されていた<sup>9)</sup>。ローマにおいては、オラトリオ会により、いち早く、公に開かれた図書館<sup>10)</sup>が創設されたのである<sup>11)</sup>。そして、オラトリオ会の理念に則り、ボッロミーニが、広く公に知識を提供する、開かれた図書館の計画を実現させたのであった。

本稿においては、ボッロミーニが、オラトリオ会の大建造物の全体計画を進める中で、いかにその宗教的な空間の中に、世俗の外来者を受け入れる動線・空間を導入し、知を求める全ての人を受容可能な図書館を創り上げたのかを読み解こうと試みている。

## 2. オラトリオ会における初期の図書館計画(16世紀末～1620年頃)

まず初めに、ボッロミーニの計画に先行するオラトリオ会の図書館計画を理解する必要がある。先述したように、それは、1581年のスタツィオによる蔵書の寄贈に始まり、来訪する誰もが

閲覧可能であるように、とのスタツィオの遺言を尊重して<sup>12)</sup>、オラトリオ会の図書室の管理・運営が図られた。

16世紀末の創立当初の図書室は、17世紀初頭に制作された地籍図<sup>13)</sup>【Fig. 3】において、考察できるが、それは、旧教会堂の左側（西側）に隣接して中庭をL字型に囲む、一連の細かい区画の中のいずれかの部屋であったと推測される<sup>14)</sup>。後に、教会堂は大規模なものに新設され、そのアプスの背後（北東部）に、オラトリオや聖具室などの同会にとって重要な施設が備えられていったが<sup>15)</sup>、図書室に関しては、1587年に至っても、不備な点を補いながら、引き続きその場に残留され、利用され続けていたことが確認されている<sup>16)</sup>。

これに対して、施設全体の計画案の最も早い事例である、建築家マルティーノ・ロンギ・イ

ル・ヴェッキオ Martino Longhi il Vecchio (1534-1591年)による図面<sup>17)</sup>【Fig. 4】は、さらに早く、1586年に作成されたもので、新たな教会堂の東側の敷地に、居住施設全体が統合されている。これによって、当時のオラトリオ会が、必要な施設と居室を、新たに1つの大建造物としてまとめ上げようと企てていたことが明らかである<sup>18)</sup>。

ようやく1602年6月には、オラトリオ会の図書室も、教会堂の東側に移される決定がなされ、「(オラトリオの) 広間の上の旧居室 le camere del novitiato vecchio sopra la sala」が、その移転先に選択された。それは、パリオーネ通り沿いのサンテリザベッタ修道会の跡地の中で、礼拝堂のあった大きな区画であり、大人数を収容するオラトリオには、大規模な空間が必要であったために、それが割り当てられた<sup>19)</sup>【Fig.

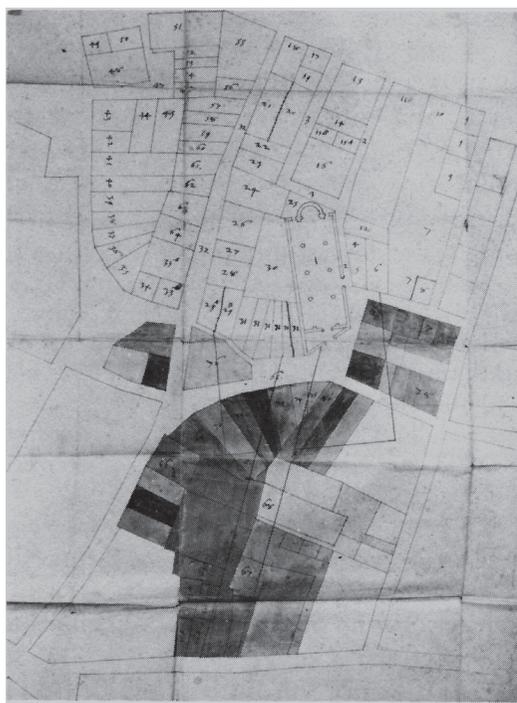


Fig. 3 パオロ・マルシェッリが作成したとされる地籍図 ACOR, A. V. 14 (1626年末-1627年)

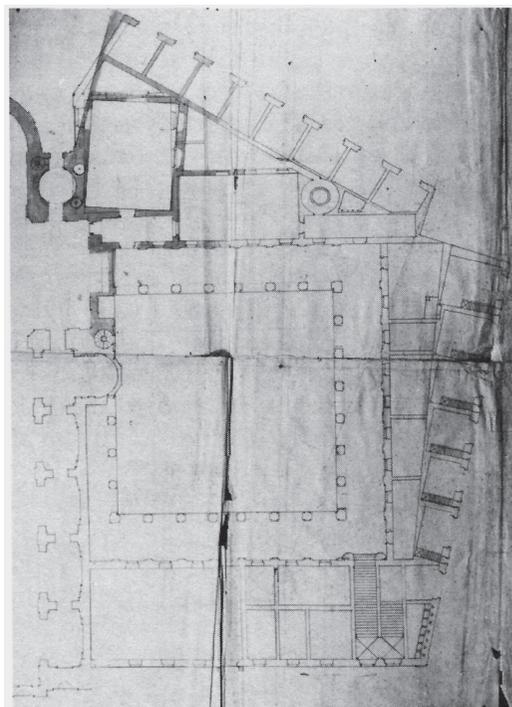


Fig. 4 マルティーノ・ロンギ・イル・ヴェッキオによるオラトリオ会の教会堂および施設の計画案 ACOR, C. II, 8, n. 5 (1586年)

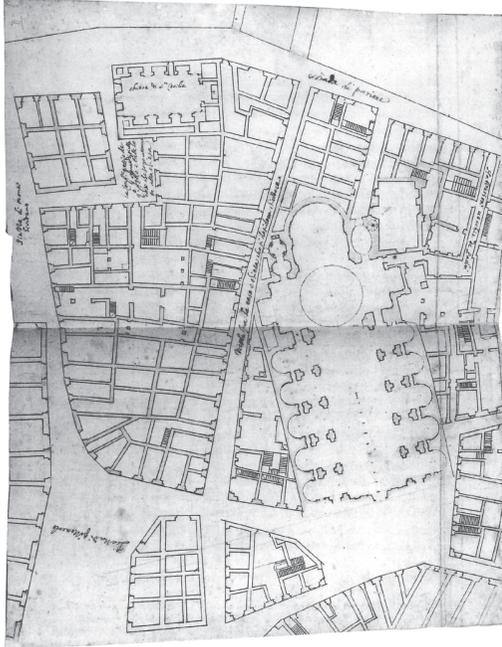


Fig. 5 マリオ・アルコーニオが作成したとされる施設建設のための教会堂西側の地籍図 ACOR, C. II. 6, A/I-II (1621年頃)

5】。図書室は、将来的に多くの蔵書の寄贈を受け、書物の数は増加していく見込みであったから、多くの書物を収納するためにも、計画当初から大規模な空間を求めて、オラトリオの上に載せられることになった。

しかし、図書室が新教会堂の東側に移されたことが確認できるのは、さらに遅く、1620年になってのことである。ジャンチント・ジーリ Giacinto Gigli (1594-1671年) による『ローマ日記』には、1620年5月28日に、ヴァチカンの祝祭で打ち上げられた花火から、火の粉がオラトリオ会の建物内に舞い込み、会の創始者であるフィリッポ・ネーリの居室・個人礼拝室だけでなく、図書室もまた、火災の被害に遭ったことが伝えられている<sup>20)</sup>。これによって、スタツィオの遺贈書を取っていたオラトリオ会の図書室は、実際には1620年よりも前に、新たな教会堂の西側から、教会堂東側の地に移され、ネーリ

の居室の近くに構えられていたことが明らかである<sup>21)</sup>。

ところで、前述したように、新教会堂の東側では、図書室は、大規模な空間を確保するために、オラトリオの上部に配置されることになったが、この場所はまた、外部から人が来訪する動線を重視したことから、決定されたものであると考えられる。なぜなら、図書室には、オラトリオと同様に、外部から多くの人々が訪れることが想定されるからであり、施設の中では、公に向かって開かれた場所が選択されたと考えられるからである。オラトリオ会の生活動線は、当時この界限における主要な通りで、敷地北側を走るパリオネ通り Via di Parione<sup>22)</sup>【Fig. 1】との繋がりに重点が置かれていた。特に、世俗との関わりが強く、同会の象徴であるオラトリオは、パリオネ通りに面し、建物の出入口付近に配置された。その上部に配置された図書館もまた、世俗との関わりが強く、建物の奥まった部分に閉ざされるのではなく、外部に向かって開かれた場所を形成する。オラトリオに集まる人々や、図書館の利用者に対して、動線上の利便性が配慮される必要があるが、その一方で、居室などの建物内の閉鎖的な空間には、世俗の要素が入り込まないように、しっかりと分離された状態が確保されていなければならなかった<sup>23)</sup>。

以上のように、オラトリオ会の図書室は、その成立期から、スタツィオの理念に基づき、外来者の利用を前提とし、施設の建物の中では特に、公に開かれた場所を選んで配置されていた。

### 3. 教会堂の西側への敷地移転・拡張期

#### 3-1. アルコーニオによる計画 (1620年代初頭)

図書館の計画の次の段階は、オラトリオ会が、教会堂の西側に、徐々に敷地を獲得し、統合的な大建造物を創り上げようとする時期に相当す

る。教会堂のすぐ西側には、ピッツォメルロ通り Via di Pizzomerlo 【Fig. 3, 5】が斜めに縦断し、敷地の限界を明白に示していた。これによって、オラトリオ会は、初めは教会堂の東側に施設の統合を図り、西方への敷地拡張に対しては、積極的な態度はとらなかった。しかし、後に他の修道会が、西方にある敷地の買収を検討した折に、オラトリオ会もまた、西側への居住棟の移設・拡大に対して、具体的に関心を持ち始め<sup>24)</sup>、1621年に、ピッツォメルロ通りを閉ざす許可を得ると、西側に広く敷地を獲得し、新たな施設を建設する計画にとりかかった。その全体計画案<sup>25)</sup> 【Fig. 6】を作成したのは、マリオ・アルコーニオ Mario Arconio (1575-1635? 年)であった。

アルコーニオは、地上階の平面図において、3つの中庭をもとに、建物の全体構成を考案し

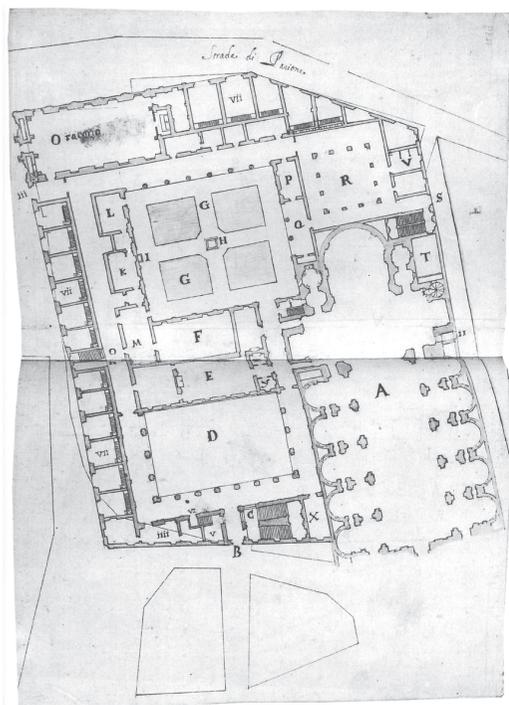


Fig. 6 マリオ・アルコーニオが作成したとされる教会堂西側の施設建設の計画案 ACOR, C. II. 6, F/XI-XII (1621-1623年)

た。建物の南側ファサードは、教会堂の奥行き  
の軸線に対し、直角をとらず、敷地形状に沿った斜めの形状とされ、中央付近に「第一の入口 Prima entrata」(同図、B)、その右手には「主要階段 Scala principale」(C) が設けられた。これによって、世俗と強く関わる場所は、建物の南側に設定されたことが理解できる。南側の「中庭 Cortile」(D) もまた、外部との結びつきが強い領域であると考えられるが、これに対し、「聖具室 Sacristia」(E) を挟んで北側に配置された「第二の中庭 2. Cortile」(G) の周囲には、「大食堂 Refettorio」(F) や「調理場 Cucina」(K) など、オラトリオ会の私的な空間が配置されていることから、その領域は、閉鎖性が強い、奥まった場所である。

この平面図において、オラトリオは、北側のパリオネ通り沿いにあり、建物の北西方向に位置するモンテ・ジョルダノ広場 Piazza di Monte Giordano に、ファサードを向けている。オラトリオ会の議事録を見ると、1622年に、以前この領域に建っていたサンタ・チェチリア聖堂 Chiesa di Santa Cecilia の場所を、オラトリオの建物に充てようとする提案がなされた<sup>26)</sup>。聖堂の広い空間は、オラトリオに改築するには容易で有効であったと思われるが、アルコーニオの計画案をその測量図<sup>27)</sup> 【Fig. 5】と見比べると、オラトリオの平面の大部分は、サンタ・チェチリア聖堂の平面に重ならない。それよりむしろ、北西の角地は、現在でも時計塔が建つように、オラトリオ会の象徴性を表すことができ、また、多くの人々を招き入れられるように、モンテ・ジョルダノ広場に向けて出入口を設定できることから、北西の角地がオラトリオの場所として選択されたと考えられる。

図書館については、やはり大規模なオラトリオの空間の上部を占めていた可能性はあるものの、地上階を扱う同図だけでは、確証は得られ

ない。しかし、北西の角地が、外部空間との結びつきが強い場所である点を併せて考えても、その可能性は否定できない。

### 3-2. マルシェッリによる計画(1624～1637年)

アルコーニオによる計画の後を、パオロ・マルシェッリ Paolo Maruscelli (1596-1649年)が引き継ぎ<sup>28)</sup>、1624年から1637年にかけて、オラトリオ会の建築家を務めた。マルシェッリによる1624年の計画案<sup>29)</sup>では、オラトリオは、現在あるように、建物の南西方向の場所に移され<sup>30)</sup>、1627年の計画案<sup>31)</sup>【Fig. 7a】においても、オラトリオは建物の南西の角部に配置されている。

この1627年における計画案は、さらに細かい修正がなされるものの、最終的な段階のマルシェッリの計画を表すものであり、後にボッロ

ミーニとも協働するオラトリオ会士のヴィルギリオ・スパーダ<sup>32)</sup> Virgilio Spada (1596-1662年)とともに作成された。残された図面資料には、全4層の建物の各層の平面図が表され、図中の各部屋にふられた部屋番号は、別紙の具体的な室名に対応する。

この計画案において、図書館は、2層目の平面図における教会堂のアプスの背面にあり、地上階の大食堂の上に乗る形である【Fig. 7b】。図書館は東西方向に長く、東端では南に折れたところに、古文書室等が配置され、反対側の西端には、図書館の前室が設けられた。図書館の利用は、そのさらに西側にある折返し階段を使うが、階段まで至るには、建物の北東角部の入口から、三角形の中庭を通り抜けて行く。ところが、この中庭は、大食堂や調理場などに囲まれた私的な生活の場であり、さらに、2層目の

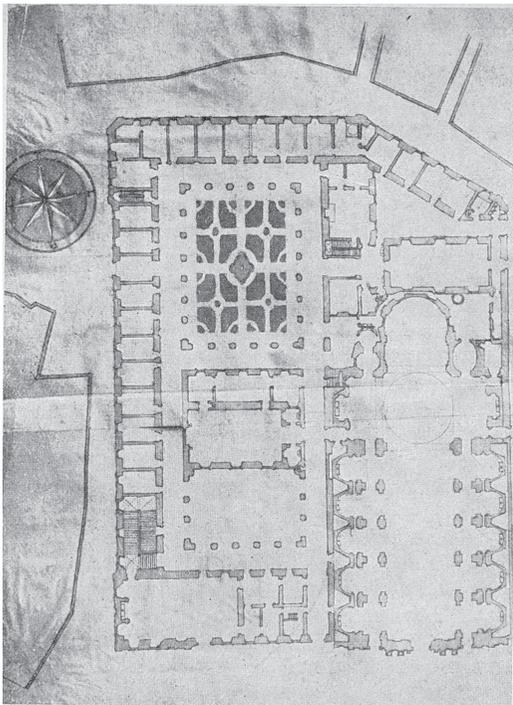


Fig. 7a パオロ・マルシェッリによるオラトリオ会施設の最終段階の計画案(地上階の平面図) ACOR, C. II, 8, n. 10 (1627年)

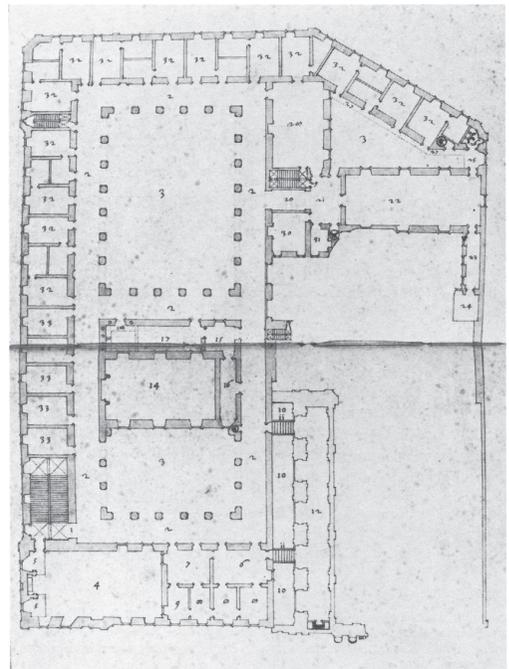


Fig. 7b パオロ・マルシェッリによるオラトリオ会施設の最終段階の計画案(2層目の平面図) ACOR, C. II, 6, D/VII-VIII (1627年)

図書館前室の北側には、オラトリオ会の集会室が隣接している。それは、オラトリオ会が運営上の全ての事柄について、全員で話し合いをして決定するという、きわめて重要な場所であり、外部の雰囲気は紛れ込まない閉ざされた部屋であるはずのものであった。図書館が集会室と1つの階段を共用し、また、両者が同じ三角形の中庭を囲む状態では、世俗を遠ざけて集会室の閉鎖的な空間を厳密に確保することは難しいと考えられる。

もちろん、図書館を訪れるには、他の経路がないわけではないが、教会堂のファサード脇の南側の主要出入口から入ったとしても、この折返し階段を上るまでには、会員たちの生活空間が構成される、聖具室の北側の中庭を囲む回廊を通ることになる。

以上のように、マルシェッリの計画では、図書館の配置計画や動線上の問題が認められるが、1629年に建設活動が開始されてからも、また新たな課題が生じた。それは、教会堂の西側の袖廊北側に、新たな礼拝堂の領域を建設することであるが、東方の敷地に残された旧居住域から、礼拝堂の領域までを繋ぐ通路として、この図書館を利用する計画が提案された。ネーリの生前の個室と礼拝室は、前述したように、1620年に火災の被害を受けたが、その後も旧居住域に保存されてきた。しかし、1634年から、これらが、教会堂の西側の袖廊北面に建立されたフィリッポ・ネーリの礼拝堂に隣接する場所に移設されることになると<sup>33)</sup>、旧居住域から、教会堂のアプスの背後を廻り、新たな礼拝堂の領域に至るためには、図書館を通り抜けることになる。当時、礼拝堂の領域を訪れるのは、オラトリオ会士たちに限らず、一定の身分であったにせよ<sup>34)</sup>、外部の来訪者もあり、図書館をこれらの人々が通過するのでは、仮設的な処置であったにしても、当然、そこに落ち着かない雰

囲気もたらされることになる。

ところで、1627年のマルシェッリの3層目の平面図において、オラトリオの上部にあたる南西角部には、説教師の部屋が配置されている【Fig. 7c】。オラトリオ会は、四旬節の期間のみ、カプチン会の修道士を、説教師として招き、建物内に宿泊させた<sup>35)</sup>。その部屋の配置には、『オプス』にあるように<sup>36)</sup>、幾つかの課題を解決しなければならなかった。まず、オラトリオ会士たちの居室から隔てられたところに、説教師が周囲に気遣いせず、快適な生活を送ることのできる個室という設計条件があり、また、その個室まで、調理場から食事を手配する動線も必要であった。もちろん、説教のために、部屋から教会堂やオラトリオに向かう経路、さらには、勉学のために図書館を訪れる際の動線上の配慮も不可欠であった。また、これらの条件を満た

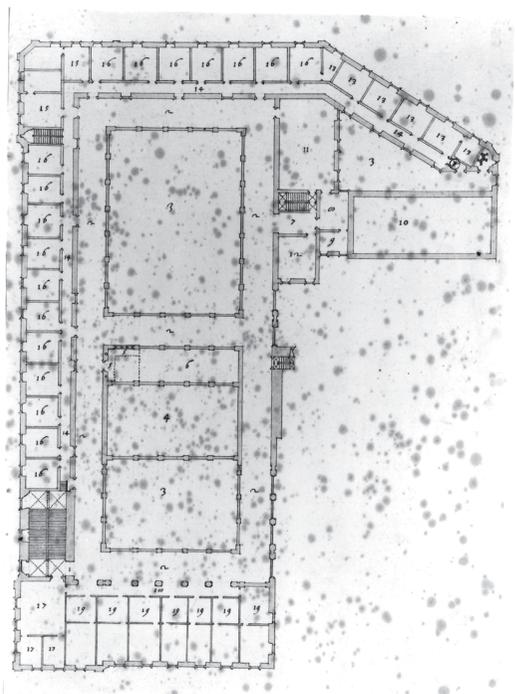


Fig. 7c パオロ・マルシェッリによるオラトリオ会施設の最終段階の計画案（3層目の平面図） Alb. 279, Wien (1627年)

しながら、説教師の個室は、会士たちの居室からはしっかりと区分され、かつ、オラトリオ会の共有スペースである中庭には容易に通じることが望ましい。

以上のことを踏まえて、マルシェッリの計画案を見ると、説教師の部屋には、まず、外部に開放性の高いオラトリオの上部が選択されたと考えられる。動線としては、建物の南側の主玄関から、外来者を受け入れる中庭を通り、西端にある主階段を利用する。しかし、建物の南西角地に配置された個室では、図書館および調理場からあまりにも離れた場所となり、説教師の生活上の利便性に十分に対応できない場合も生じてくる。この場所の選択は、一時的に滞在する説教師のための利便性よりも、その個室が、オラトリオ会士たちの私的な居室の領域から確実に隔てられていることを重要視した結果であると思われる。だが、説教師が、建物のほぼ対極の北東にある図書館を利用するには、オラトリオ会士たちの私的な空間を通り抜けることになる。

マルシェッリの計画案における図書館に関しては、その配置計画から、利用方法、図書館と他の部屋との関係に至るまで、解決すべき幾つもの重要な問題を抱え、それらが残されたままの状態、ボッロミーニが後を引き継ぐことになったのである。

#### 4. ボッロミーニによる計画

ボッロミーニは、1637年5月、オラトリオ会の建築計画に関わり始めた頃<sup>37)</sup>、まずマルシェッリの計画案を模写してから<sup>38)</sup>、自己の創案に取りかかった。そして、マルシェッリと同様に、ボッロミーニもまた、オラトリオ会士のスパダ司祭と協働した<sup>39)</sup>。

ボッロミーニの1636-1637年の全体計画の平面図を見ると、オラトリオは、マルシェッリの

計画案と同じ南西角部の位置にある<sup>40)</sup>【Fig. 8】。図書館に関しては、この頃にはまだ、オラトリオの上部ではなく、建物の北東方向にあった。北東部の三角形をなす中庭を囲み、マルシェッリの計画【Fig. 7a】に対して、ボッロミーニの案では、地上階の教会堂のアプスの背後にあった大食堂と、それと直角をなす調理場の位置を入れ換えた形をとる。同時に、大食堂上部の図書館もまた、教会堂のアプスの背後から、90度回転し、この配置転換によって、図書館の内部空間には、より多くの自然光が取り込まれることになった。また、礼拝堂の領域に行く人が、教会堂のアプスの背後にあった図書館を通り抜けるという、落ち着かない雰囲気は図書館内にもたらされることはなくなった。さらに、オラトリオ会士たちが大食堂に行く際には、北側のパリオーネ通りに接して設けられた「洗手所 lavamani」を通るため、図書館に行き来する人が大食堂の南側にある階段を利用したとしても、両者の経路が交錯することはない。

ところが、1638年8月に、オラトリオ会では、図書館をオラトリオの上部に移設する案が採決

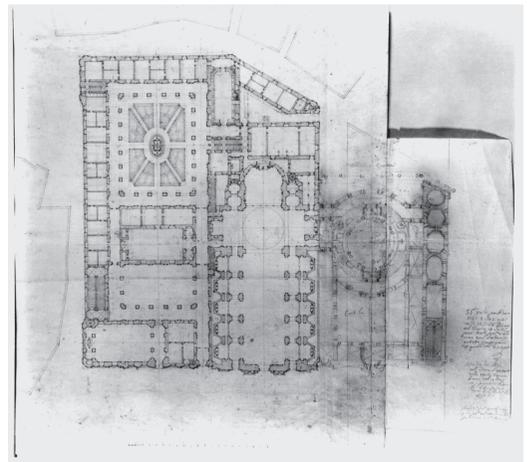


Fig. 8 フランчесコ・ボッロミーニによるオラトリオ会の施設全体の計画案（地上階の平面図） Alb. 285, Wien (1636-1637年) 教会堂の右側は1644年にデザインを付加

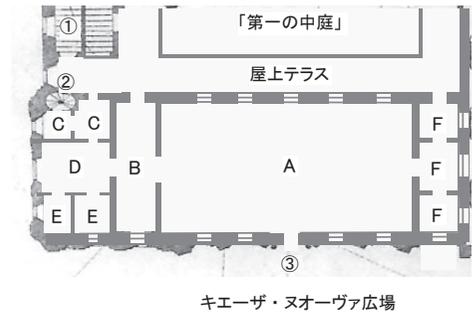
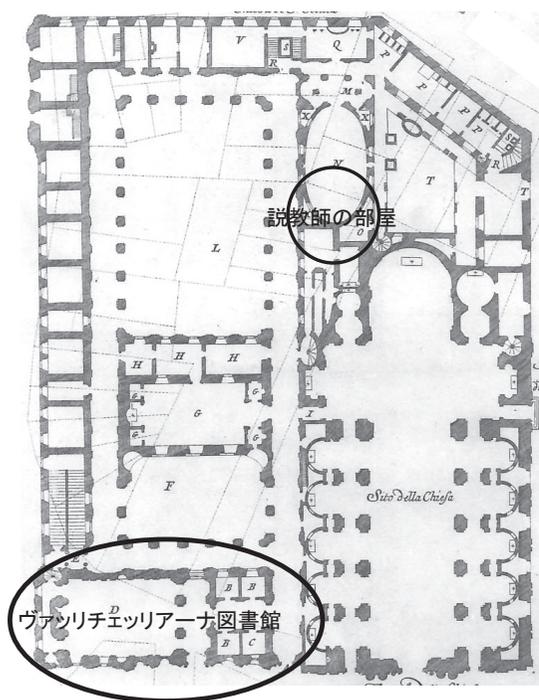
され<sup>41)</sup>、これに伴い、ボッロミーニもまた、計画を大きく変更しなくてはならなくなった。ボッロミーニは、オラトリオ会の意思に従い、南側の広場にファサードを向けて立つ教会とオラトリオと同様に、図書館もまた、外部からの人々を広く受け入れる、開かれた施設として、世俗社会との繋がりが強い領域に再構築されることになった。1642年に、その実施計画が開始された<sup>42)</sup>。

ボッロミーニによるオラトリオ会の図書館の計画の最終的な考え方は、『オプス』の第28章の「図書館について」に、詳しく記述されている<sup>43)</sup>。特に、その冒頭では、図書館の規模の大きさや目録の豊かさだけでなく、外来者が利用しやすく、かつオラトリオ会士たちの居住棟に、落ち着いたのない雰囲気をもたらすことのないように、配置・動線上の計画と、図書館の管理・

運営方法についての気配りが強調されている。

まず、ボッロミーニによる図書館が、大空間の主室、その西側にある図書館の司書室・古文書室・アトリウムなど5つの部屋、東側の3つの閲覧室という構成であったことが、そこから読み取れる【Fig. 9】。会士たちと外来の者が勉強できる閲覧室には、机や椅子、さらに紙やペン、インクが備えられた。来訪者は、教会の左脇の主玄関から建物に入ると、外来の人を受け入れる「第一の中庭」の回廊を通り、来客用の主要階段を2度折り返し、3層面（2層目の上に設けられた屋上テラスと同じ床面の高さ）まで上って図書館に至る。図書館の出入口には、来訪者が雨水に濡れることのないように、覆いが架けられるなど、細心の注意が払われていた。

図書館の利用方法においては、外来者が管理人に気遣うことなく、勉強に勤しむことができ



- A 図書館
- B アトリウム（図書室の前室）
- C 図書館司書の部屋
- D 図書の貸し出し室（開架の書架）
- E 古文書・古物などの収納・展示室、またはスパルダによるメダル収集の保管・研究室
- F 会士たち・外来者の閲覧室

- ① 主階段
- ② オラトリオ（地上）に下りる螺旋階段
- ③ 図書館のバルコニー

Fig. 9 『オプス・アルキテクトニクムアルキテクトニクム』によるボッロミーニのヴァッリチェッリアーナ図書館の計画（平面図） 筆者作成

る工夫が、『オプス』から窺われる。それによると、外来者は、閲覧したい書物を管理人から受け取った後は、主室を出て、先述した閲覧室に入り、自由に勉強できる仕組みである。さらには、屋外テラスに出ることもでき、立ち去るときには、管理人に声をかけて、本を返却すればよい<sup>44)</sup>。このように、誰にとっても居心地のよい場所となるように配慮し、かつ、動線上は、来訪者が会士たちの居住空間を乱すことのないように計画されていた。ただし、基本的に、来訪者が図書館の大部屋で書物を探す際には、管理人に付き添われ、求める書物を手渡された後には、そこに通じる扉が閉ざされるのであるから<sup>45)</sup>、外来者は、一人で自由に大部屋の書棚を見て歩いたり、そこに留まったりすることはできなかった。

しかし、オラトリオ会士に限ってみても、主室の大部屋の中において、本棚から本を持ち出し、自由に勉強できる机や椅子に関しては、『オプス』には何も記述がない。これについては、天井や本棚などによる印象的で豪華な装飾デザインが施された主室の大空間における見通しを考えるなら、部屋の中央部分は、机や椅子などで遮られることなく、開けた視界のもとで、軸線が貫き通されている方が、いっそう効果的である。『オプス』には、7段に本を並べる本棚に、それぞれ斜めの書見台が設けられ【Fig. 10】、書物を本棚から取り出し、書見台の上に置いて読む、とあるから、本棚を離れずに、起立したままその場で本を閲覧するという方法が採用されていたと判断できる。

さらに、『オプス』の記述から、主室の大空間の利用法を読み取ることができる<sup>46)</sup>。まず、大空間の部屋の周囲を巡る本棚は、旧居住域の図書室から持ち運ばれたもので、ポッロミーニは、これを2層にしたが、本の増加により、3層目も追加できるデザインとした。また、2層



Fig. 10 ヴァッリチェッリアーナ図書館の本棚（1層目）



Fig. 11a ヴァッリチェッリアーナ図書館の南側本棚と2層目の歩廊、窓



Fig. 11b ヴァッリチェッリアーナ図書館の南側本棚と2層目の歩廊、錠戸を閉ざした窓

目の本棚を利用するには、部屋の四隅に設けた階段から、手摺付きの歩廊に上る。南側の歩廊には、壁面に窓が開かれ、その壁の厚みに足載せ台を付けた小机が設置された、とある。ここは、本を探して歩き廻る人に煩わされることなく、外の景色を楽しみながら、落ち着いて勉強できる場所である【Fig. 11a, 11b】。このような机と椅子の配置に対して、細かく気を配った記述内容から考えると、1層目で閲覧するには、主として本棚に備え付けの斜めの書見台を使う方法であったと考えられる。また、『オプス』に、オラトリオ会士たちが、各居室に持ち出すことのできる貸し出し用の本は、主室ではなく、その西側にある5つの部屋のうち、中央の部屋に収められていた、とわざわざ記されている点からも、主室にある書物は、オラトリオ会士であっても、本棚から自由には持ち出せず、基本的に、本棚のもとで起立した状態で閲覧する仕組みになっていたと推察される。

なお、書見台のもとで本を閲覧する方法は、中世のヨーロッパ各地の図書館で採用され、ボッロミーニ自身も、サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ跣足三位一体修道会<sup>47)</sup>内で、1634-1635年に計画した居住棟の4層目の図書室<sup>48)</sup>において、早くからその方式を用

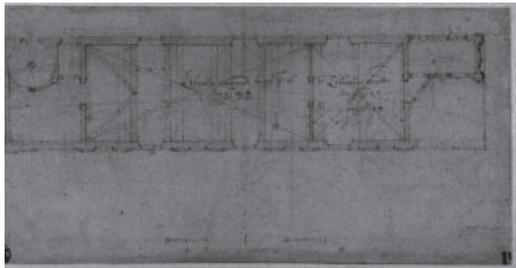
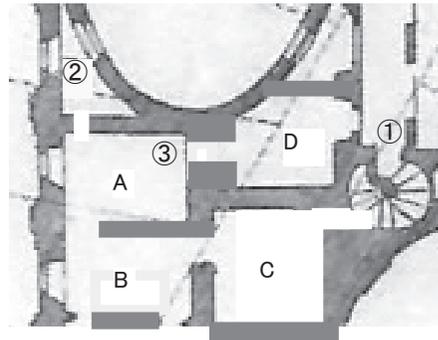


Fig. 12 フランチェスコ・ボッロミーニによるサン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ修道院の図書室の計画（4層目平面図）Staatliche Museen zu Berlin, Kunstbibliothek, inv. 1049.

いていた<sup>49)</sup>【Fig. 12】。オラトリオ会の大空間の図書館においても、ボッロミーニは、同様な利用形式を選択したのであった。

ところで、先述したように、外来の説教師の部屋は、説教師が、会士たちの居室の領域に立ち入ることなく、図書館を利用でき、かつ、動線上は、建物の奥にある調理場と繋がっている必要があった。ボッロミーニがその部屋を設けたのは、礼拝堂の領域の上部で、「第二の中庭」を囲む屋外のテラスに面する場所である<sup>50)</sup>【Fig. 9, 13】。説教師は、共有空間であるこのテラスで休息をとることもできるが、それを南西方向に進み、単純な経路で図書館の入口に至る。テラスでは、説教師が会士たちと出会う可能性があるものの、会士たちの居住域においては、テラスの高さが、会士たちの居室が面する廊下の高さとは異なるため、彼らの居室とその周辺領域の閉鎖性は、確保されている<sup>51)</sup>。また、説教



- |          |              |
|----------|--------------|
| A 説教師の居室 | C テラス        |
| B 説教師の寝室 | D 説教師の随伴者の寝室 |

- ① 調理場への階段
- ② ピアノ・ノービレ（2層目）に下りる階段
- ③ AからDへの下り階段

Fig. 13 『オプス・アルキテクトニクムアルキテクトニクム』によるボッロミーニの説教師の部屋とその周辺の計画（平面図）筆者作成

師の生活に必要なものを供給するにしても、その動線が会士たちの居住域に侵入することなく、建物の北東部分にある調理場まで、教会堂のアプスの外側に接する別の小さな回り階段が使用される<sup>52)</sup>。

説教師の部屋は、長期にわたってピッツォメルロ通りが敷地境界となっていた場所で、土地買収上にも問題が生じた領域にあり、さらに、楕円の大食堂を切り取った余りのような場所であったが、ボッロミーニは、そのような特徴をむしろ活用する形で、説教師の部屋と、他の空間との関係を考えて。そして、説教師の部屋が、図書館から離れた位置にあっても、両者の繋がりには緊密であるように、十分に配慮されていたのである。

## 5. 結び

ヴァッリチェッリアーナ図書館の計画の根底には、知識を求める人を広く受け入れようとするオラトリオ会士たちの理念があり、ボッロミーニは、それを十分に尊重し、意匠デザインだけでなく、計画には細かい点まで配慮した利便性の高い図書館を実現した。『オプス』に記されたように、ボッロミーニは、高い知的レベルと莫大な数の蔵書を誇るオラトリオ会の図書館の象徴として、装いの豊かな大空間を創り上げた。一方、印刷本が普及し、将来的には、寄贈などを重ねていく可能性から、ボッロミーニは、求められる収容力に対応可能で、実用性のある本棚を、旧来のものを利用しつつ、独創的なデザインによって創り上げた。

また、図書館を訪れる外来者によって、オラトリオ会士たちの私的な生活が乱されることのないように、ボッロミーニは、建物内の垂直方向・水平方向の動線計画・各室の配置計画を入念に検討した。建物内に一定期間滞在する外来の説教師の部屋であっても、ボッロミーニは、

それが図書館から離れた場所にあるにもかかわらず、説教師が図書館を利用しやすい動線計画を考案した。ボッロミーニは、オラトリオ会士たちの居室部分の閉鎖性を確保し、大建造物内部の複雑に絡み合う各部屋・各領域の関係を見極めた上で、図書館の計画を成し遂げたのである。

## 略式表記

ACOR: Archivio della Congregazione dell'Oratorio a Santa Maria in Vallicella a Roma (サンタ・マリア・イン・ヴァッリチェッラ・オラトリオ会古文書室、ローマ)  
Alb.: Graphische Sammlung, Albertina Museum, Wien (アルベルティーナ素描版画資料室、ウィーン)

*Opus*, 1725 : Borromini, Francesco, *Opera del Cav. Francesco Borromino Cavata da Suoi Originali cioè L'Oratorio, e Fabrica per l'Abitazione De PP. Dell'Oratorio di S. Filippo Neri di Roma; Con le vedute in Prospettiva, Con lo Studio delle Proporzioni Geometriche, Piante, Alzate, Profili Spaccati, e Modini....*, (edizione di Sebastiano Giannini, Roma, 1725) , in Biblioteca Vallicelliana, Roma (フランチェスコ・ボッロミーニ『オプス・アルキテクトニクム』ジャンニーニ版 1725) .

1) バロック期のローマ建築界においては、フランチェスコ・ボッロミーニおよび、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ Gian Lorenzo Bernini (1598-1680年)、ピエトロ・ダ・コルトーナ Pietro da Cortona (1596-1669年) が三大巨匠とされている。いずれも、教皇のもとに仕え、当時のローマにおける主要な建築計画に関わっていた。ベル

ニーニが、主に彫刻家として広く活躍し、コルトーナが、絵画制作の仕事も多く受け持っていたのに対し、ボッロミーニは、石工として修業を積み重ね、ローマで古代建築の研究に勤しみ、職人から鍛え上げられた建築家である。ボッロミーニの生涯については、同時代のバルディヌッチとパッセリによる著作の信憑性が高い：Baldinucci, Filippo, *Notizie de' professori del disegno da Cimabue in qua, Secolo V. dal 1610 al 1670*, vol. 6, Firenze, 1728; Passeri, Giambattista, *Vite de' pittori, scultori, ed architetti che hanno lavorato in Roma, morti dal 1641. fino al 1673.* (Roma, 1772, 1a ed.), Bologna, Arnaldo Forni Editore, 1999, pp. 383-389.

- 2) ボッロミーニが最も早くオラトリオ会の仕事に関わった年代は、1634年4月まで遡ることができる。ボッロミーニは、当時オラトリオ会からの仕事を請け負っていた大工のタッデオ・ランディ Taddeo Landi (1560-1643年) と協働し、同会の教会堂サンタ・マリア・イン・ヴァツリチェッラ聖堂 Santa Maria in Vallicella (後にキエーザ・ヌオーヴァ聖堂 Chiesa Nuova と呼ばれる) から、聖具室や居住施設に向かう扉口を、黒大理石で制作した。ACOR, C. I. 6, p. 243; Connors, Joseph, "Early Projects for the Casa dei Filippini in Rome", *Oratorium. Archivum Historicum Oratorii Sancti Philippi Neri*. VI, 1975, (pp. 107-117), p. 111, nota 17. その後、ボッロミーニは、聖具室における祭壇のデザイン (Alb. 910) をランディとともに制作した報酬として、1636年12月15日に支払いを受けた：Pollak, Oskar, *Die Kunsttätigkeit unter Urban VIII*, Band I, Wien, Dr. Benno

Filser Verlag, 1928, p. 430, Reg. 1699; Connors, "Early Projects...", *op. cit.*, 1975, p. 111, nota 17; Connors, Joseph, *Borromini and the Roman Oratory: Style and Society*, Cambridge, Mass., London, MIT Press, and New York, The Architectural History Foundation, 1980, pp. 203-205, Cat. 28. ボッロミーニがオラトリオの建築家に承認されたのは、1637年5月10日であった：Incisa della Rocchetta, Giovanni - Connors, Joseph, *Documenti sul complesso borrominiano alla Vallicella (1617-1800)*, Roma, Società Romana di Storia Patria, 1983, pp. 41-42, nn. 103, 105; Hempel, Eberhard, *Francesco Borromini*, Wien, Kunst Verlag Anton Schroll & Co., 1924, p. 69; Incisa della Rocchetta, Giovanni (trascritto da), "Un dialogo del P. Virgilio Spada sulla fabbrica dei Filippini", *Archivio della Società Romana di Storia Patria*, XC, 1967, (pp. 165-211), p. 182, nota. 23; Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, pp. 27-28, p. 118, note 15; *Borromini's Book—The "Full Relation of the Building" of the Roman Oratory by Francesco Borromini and Virgilio Spada of the Oratory* (Translated with a commentary by Kerry Downes), UK, Wetherby, Oblong Creative Ltd., 2009, p. 62, n. 54.

1652年8月に、ボッロミーニは解任され、カミッロ・アルクッチ Camillo Arcucci (?-1667) がオラトリオ会の建築家に任命された：Connors, *ibidem*, 1980, pp. 52-53, 103.

- 3) オラトリオ会 Congregazione dell'Oratorio di Roma a Santa Maria in Vallicella は、フィレンツェ出身の創始者フィリッポ・

ネーリ Filippo Neri (1511-1595) と、その弟子たちにより結成された。ネーリは、1533-34年にローマに移り住み、宗教的な奉仕活動をする一方で、一人きりで神に祈る隠修士的な側面を併せ持っていた。ネーリは、世俗の市民たちと、ともに聖書を朗読し、郊外の聖堂を訪れ、歌を歌い、対話を重ねるなど、その身近で活動し、やがて多くの信者が集うようになった。1563-1564年に、ネーリの最も身近な3人の弟子がフィレンツェ人のコミュニティ教会堂であるサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ聖堂 San Giovanni dei Fiorentini の主任司祭を務めるようになると、ネーリを囲む集団は、確固とした信心会を創設するに至った。1575年7月15日に教皇グレゴリウス13世から、彼らによる独自の教会堂として、サンタ・マリア・イン・ヴァッリチェッラ聖堂が与えられて以降、オラトリオ会は、聖堂周辺の土地買収と建設工事を進め、ローマの市中で最も大規模な宗教施設を所有する宗教団体の一つへと発展した。Ponelle, Louis - Bordet, Louis, *St. Philip Neri and the Roman Society of His Times (1515-1595)*, translated by Ralph Francis Kerr, London, Sheed & Ward, 1932 (1929 in French), pp. 70, 166 ff.; pp. 257-258, 317; Connors, *Borromini*, *op. cit.*, 1980, pp. 5-7. Cfr., *La regola e la fama: San Filippo Neri e l'arte, per il IV Centenario della morte di S. Filippo Neri*, Ministero per i Beni Culturali e Ambientali, Roma, Electa, 1995.

4) 1634年からボッロミーニが計画に取りかかった、サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ聖堂とその修道会施設 San Carlo alle Quattro Fontane, la chiesa

e il convento dei Padri Trinitari Scalzi の計画は、オラトリオ会の建築計画と並行する時期もあった。さらに、サンティーヴォ・アッラ・サピエンツァ聖堂 Sant'Ivo alla Sapienza の躯体工事 (1643-1648年)、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂 San Giovanni in Laterano (1646-1650年) の改修、パラッツォ・プロパガンダ・フィーデ Palazzo di Propaganda Fide のファサード (1644-1665年) などが、ほぼ同時期の1640年代から1650年代にかけてのボッロミーニの主要な計画である。

5) 1725年にセバスティアアーノ・ジャンニーニによって出版された『オプス・アルキテクトニクム』(以後、これを『オプス』と略記)に収められた数々の図面においても、ボッロミーニのデザインを理解することができる。ボッロミーニは、建築に造詣の深い、オラトリオ会士のヴィルジリオ・スパーダ司祭(注32参照)と協働し、オラトリオ会の建築を対象とする建築書を著そうと試みたが、実現に至ることなく、残された手稿・図面から、ジャンニーニが『オプス』を出版した。

6) ボッロミーニの独創性に富むデザインは、時には、会士たちに受け入れられないこともあった。会士たちは、教会堂とオラトリオには豪華さを求めたが、居室などの施設に関しては、簡素で機能的なデザインを要求したからである。ボッロミーニは、募る不満を、『オプス』の序論の「慈愛あふれる読者諸氏に」の中に表している。*Opus*, 1725, "Alli benigni Lettori".

7) 『オプス』では、その最終章の第28章で、図書館の計画が詳細に説明されている。*Opus*, 1725, Cap. XXVIII. この他、コナーズが直接、オラトリオ会の古文書室所蔵の

- 手稿と図面から引用し、実現されなかった建築書に、できるだけ近づけた形とした、Borromini, Francesco (a cura di Joseph Connors), *Opus Architectonicum*, Milano, Edizioni Il Polifilo, 1998. が参考になる。
- 8) Bonadonna Russo, Maria Teresa, “Origini e vicende della Biblioteca Vallicelliana”, *Studi Romani* XXVI, 1978, (pp. 14-34), p. 16; Abbamondi, Lorenzo, “Nascita di una biblioteca moderna. La Vallicelliana di Roma, dal lascito istitutivo di Achille Stazio (1581) all’anno della morte di Cesare Baronio (1607)”, in *I libri di Cesare Baronio in Vallicelliana*, a cura di Giuseppe Finocchiaro, Roma, Ministero per i beni e le attività culturali; Direzione Generale per i Beni Librari, gli Istituti Culturali ed il Diritto d’Autore; Biblioteca Vallicelliana, 2008, (pp. 155-192), p. 161.
- 9) フィレンツェでは、人文主義者ニコロ・ニコリ Niccolò Niccoli (1364-1437年) が、生前に、所有する多くの蔵書を、公の利用に役立てたいと希望していたことから、それらは、サン・マルコ修道院に遺贈されることになった。これが、ルネサンス期に最も早く実現された、公に開かれた図書館である。日本語文献では、森田義之「イタリア・ルネサンス期の図書館とメディチ家のパトロネージ」『愛知県立芸術大学紀要』(37) 2007年 pp. 51-67. を参照。
- 10) 本稿では、オラトリオ会の初期の小規模なものについては、「図書室」と記述する。また、史料・論文には“libreria”、“biblioteca”の2通りの言葉遣いが見られるが、双方とも、「図書室（または図書館）」と訳した。なお、「公に開かれた」図書館の「公」は、当時その前提として、教会関係の聖職者や修道士、あるいは博学な都市貴族といたった一定の身分にある教養人を対象としていた。すなわち、「公に開かれた」図書館は、現在のような一般に誰でも利用可能な市町村の公共図書館などの運営方式とは異なる。
- 11) バロック期のローマでは、大学・修道会などの宗教施設や世俗の邸宅建築に付属する形で、多くの図書館が設けられた。ポッロミーニが計画に関与したものとして、パラッツォ・バルベリーニ Palazzo Barberini の邸宅建築や、ローマ・サピエンツァ大学所属のアレッサンドリーナ図書館 Biblioteca Alessandrina、ドミニコ修道会の施設内部のアンジェリカ図書館 Biblioteca Angelica が挙げられる。オラトリオ会の図書館の他にも、アンジェリカ図書館は、公の利用を受け入れようという指針で、1614年に宗教的施設の内部に完成された。
- 12) スタツィオの遺言は、ラテン語で、“ex extraneis probis viris ibi convenientibus”であった。Bonadonna Russo, “Origini ...”, *op. cit.*, 1978, p. 15; Abbamondi, “Nascia ...”, *op. cit.*, 2008, p. 166. これを和訳すると、「来たる善良な方であるなら、外來の方のどなたにも」（イタリア語訳では、“di tutti gli estranei purché uomini onesti cola’giunti”）となる。
- 13) 1626-1627年に、ポッロミーニの前任者であるパオロ・マルシェッリが、周辺の土地買収のために作成した。ACOR, A. V. 14: Bonadonna Russo, “Origini ...”, *ibidem*, 1978, p. 17, Tav. I; Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, pp. 181-182, Cat. 15; Downes, *Borromini’s Book, op. cit.*, p. 57, fig. 2.
- 14) Bonadonna Russo, “Origini ...”, *ibidem*, p.

- 15) Abbamondi, “Nascita ...”, *op. cit.*, 2008, pp. 164-167. この区画が取り壊されたのは、教会堂の西側に敷地の拡張が開始された、17世紀初めになってからである。Bonadonna Russo, *ibidem*, p. 16.
- 16) Bonadonna Russo, *ibidem*, p. 16; Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, p. 101, Appendix I, 1.
- 17) マルティーノ・ロンギ・イル・ヴェッキオ Martino Longhi il Vecchio (1534–1591年)による平面図は、最も早期の全体計画案である (ACOR, C. II, 8, nn. 4-5)。新たな教会堂の東側に、中庭を囲んで、聖具室や大食堂、休憩室、居室などが配置されている。Hess Jacob, “Contribuiti alla storia della Chiesa Nuova (S. Maria in Vallicella)”, *Scritti di storia dell’arte in onore di Mario Salmi*, III, Roma, De Luca Editore, 1963, pp. 220-221, Figg. 4-5; Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, pp. 167-168, Cat. 1 a, Cat. 1 b.
- 18) ロンギの計画案には、図書館を含めた新たな施設の建設を望んでいたネーリの意見が反映されている。知識を重要視していたネーリ自身もまた、個人的に多くの蔵書を抱いていたが、それは現在のヴァッリチェッリアーナ図書館の北側の面の中央に収められている。Bonadonna Russo, “Origini ...”, *op. cit.*, 1978, p. 18.
- 19) 議事録などから、図書室は、かつてのサンテリザベッタ修道会 Monastero di Sant’Elisabettaの敷地内における礼拝堂のあった区画の3層目に構えられ、2層目の広間の上に載り、またネーリの居室の近くでもあったとされる。図書室が載る「広間 la sala」は、「オラトリオの広間 la sala dell’Oratorio」の略称である。ただし、オラトリオ会は、この決定をした時点で、まだ当地を所有していなかったことから、実際に図書室が創られたのは、さらに後である Bonadonna Russo, *ibidem*, pp. 18-19; Tav. I, n. 10 (さらに、Tav. Iにおいて、聖具室をつくるために、n. 13の場所が、1593年にオラトリオ会により買収されたが、後になって、そこには聖具室ではなく、オラトリオがつくられた); Abbamondi, “Nascita ...”, *op. cit.*, 2008, p. 161.
- 20) ジーリの日記では、1620年5月28日の夕方に、教皇パウルス5世 (在位 1605–1621年)の祝祭のために打ち上げられた花火から、飛び散った火の粉が、窓を通してオラトリオ会の建物に入り、ネーリの聖遺物を含めた生前の部屋が、全て黒焦げになり、図書室もまた焼け焦げてしまったと語られている : Gigli, Giacinto, *Diario di Roma*, I, (a cura di Manlio Barberino), Roma, Editore Carlo Colombo, 2 vols, 1994, p. 72, “A di 28. di Maggio 1620” ; Incisa della Rocchetta, Giovanni, “III- La «sala rossa» e la cappella interna di s. Filippo”, *Oratorium. Archivum Historicum Oratorii Sancti Philippi Neri*, Anno III, serie I, n. 2, 1972, (pp. 86-101), p. 99; “Il santuario filippino della Vallicella”, *Quaderni dell’Oratorio*, II, n. d. (pp. 1-25), p. 14; Bonadonna Russo, *ibidem*, p. 16.
- 21) ネーリは、1583年に、サン・ジロラモ・デッラ・カリタ San Girolamo della Caritàから、オラトリオ会の教会堂の東側にあったオラトリオ会の施設に移り、居室と個人的な礼

- 拝堂の2部屋を構えた。1620年に、ネーリの部屋が焼け焦げになったが、1634-1643年に、解体されたネーリの部屋から、一つ一つの石材が、教会堂の西側の新たな施設をつくる場所に持ち運ばれ、礼拝堂の領域が形成された。Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, pp. 201-202; figg. 73-74; Downes, *Borromini's Book, op. cit.*, 2009, pp. 76, 78; 拙稿「フランチェスコ・ボッロミーニによるローマのオラトリオ会における礼拝堂の領域の計画」『地中海学研究』(pp. 91-113), 2017, pp. 93-95.
- 22) 中世以来、ヴァチカンからテヴェレ河に架かるポンテ・サンタンジェロ Ponte Sant' Angelo を渡り、ローマ市街の主要な広場を通して、市の中心地まで繋がる主要道路として、パリオネ通り Via di Parione と、ペッレグリーノ通り Via di Pellegrino は、最も賑わいのある通りであった。北側にあるパリオネ通りは、特に宗教的な祝祭で行進のあるルートであり、一方、橋から南側に分岐する、南側のルートのペッレグリーノ通りには、銀行家や公証人などが多かった。Opus, 1725, Cap. I; Connors, *Borromini, ibidem*, p. 8; Downes, *ibidem*, p. 56.
- 23) 『オプス』の第4章では、世俗との関わりによって、3つの中庭を中心に全体計画をしたこと、第13章においては、外来者が、会士たちの生活に落ち着かない雰囲気を与えないようにした気遣いなど、建物内において細心の注意を払ったことが述べられている。Opus, 1725, Cap. IV, "Divisione generale della tutta la fabbrica"; Cap. 13, "Del secondo cortile o giardino".
- 24) 1611年に、バルナバ修道会が、拠点となる建物の土地を求めて、モンテ・ジョルダノ広場 Piazza di Monte Giordano 付近の敷地買収に乗り出すと、オラトリオ会は翻って、ここに従来から建設する意図があったと主張し、敷地の獲得に乗り出した。オラトリオ会が、教会堂の東側から西側へと、居住棟の施設全体を移し、再構築に取りかかった1620年代初頭の地割の状態は、マリオ・アルコーニオが作成したとされる土地測量図【Fig. 5】から把握することができる。ACOR, C. II. 6, tav. A (I-II), 1618-1621. (おそらく1621年のものとされる) : Hempel, *Francesco Borromini, op. cit.*, 1924, p. 65, Fig. 16; Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, pp. 11-12; pp. 172-173, Cat. 8.
- 25) ACOR, C. II. 6, tav. F (XI-XII), 1621-1623. Hempel, *ibidem*, 1924, p. 66, Fig. 17; Connors, *ibidem*, 1980, pp. 172, 174-175, Cat. 9.
- 26) Connors, *ibidem*, p. 14, p. 175, Cat. 9; Incisa della Rocchetta - Connors, *Documenti sul complesso borrominiano, op. cit.*, 1983, pp. 17-18, n. 9.
- 27) 注24を参照。
- 28) アルコーニオの全体計画面では、施設の建物が、教会堂の奥行の軸線と平行あるいは直角に配置されておらず、中庭や建物の角部は大きく歪んでいる。これは、測量ミスによるもので、このためアルコーニオは解雇され、後任のマルシェッリが、全て歪みを修正した。Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, p. 14.
- 29) ACOR, C. II. 6, tav. G (XIII-XIV) : 計画の時期は、1624-1627年の範囲で、おそらく1624年とされる。Connors, *ibidem*, pp. 178-181, Cat. 14.
- 30) 同時期の他の計画面においては、マルシェッリによる他の案とされるものも含め

- て、オラトリオは軸線を東西方向とし、教会堂のアプスの背後に置かれている。ACOR, C. II. 6, tav. E (IX-X), C. II. 8, nn. 24<sup>f</sup>, 24<sup>v</sup>. Hempel, *op. cit.*, 1924, p. 67, Fig. 18; Connors, *ibidem*, p. 176, Cat. 11; pp. 176-178, Cat. 12a. これらの中には、オラトリオが敷地中央付近に配置換えされた計画案 (ACOR, C. II. 8, n. 14. Connors, *ibidem*, p. 177, Cat. 12d) もあり、その位置づけが、まだ確定していなかったことが認められる。
- 31) 4層からなる建物の各層を著した平面図の中で、1、2層目の2枚において、南西の角部がオラトリオとされている。ACOR, C. II. 8, n. 10; C. II. 6, tav. D (VII-VIII) ; Alb. 280, Alb. 279. Hempel, *op. cit.*, 1924, pp. 68, Fig. 19; Connors, *ibidem*, pp. 185-194, Cat. 20 (a-d) ; Cat. 21.
- 32) スパーダは、既にマルシェッリとともに、オラトリオ会の建築の造営に携わっていたが、特に、経済面などの実務的な事柄に関わっていた。ポッロミーニとは、さらに、『オプス』の出版に向けて協働する一方、個人的にもオラトリオ会の建築計画についての著述も残している。Incisa della Rocchetta, “Un dialogo del P. Virgilio Spada ...”, *op. cit.*, 1967, pp. 165-211. また、教皇には側近としても仕え、特にポッロミーニがインノケンティウス10世 (在位期間 1644-1655年) のもとで重要な計画の仕事を得たのは、スパーダの役割が大きかった。Cfr. Tabarrini, Marisa, *Borromini e Spada- Un palazzo e committenza di una grande famiglia nella Roma Barocca*, Roma, Gangemi Editore, 2008.
- 33) Bruschi, Arnaldo, “Il Borromini nelle stanze di S. Filippo alla Vallicella”, *Palatino*, anno XII (4<sup>a</sup> serie), Roma, Edizioni Palatino, gennaio-marzo 1968, pp. 13-21. および、本稿注21を参照。
- 34) *Opus*, 1725, Cap. VIII.
- 35) *Opus*, 1725, Cap. XXVII.
- 36) *Ibidem*.
- 37) 注2を参照。
- 38) ポッロミーニによる平面図の模写は、1層目から4層まで順に、Alb. 285, 278, 282, 281; Connors, *Borromini, op. cit.*, 1980, pp. 210-212, Cat. 37 (a-d) ; pp. 214-218, Cat. 39. Hempel, *Francesco Borromini, op. cit.*, 1924, p. 72, Fig. 21; Portoghesi, Paolo, *Francesco Borromini*, Milano, Electa Editrice, 1977 (1<sup>a</sup> ed. : *Borromini: Architettura come linguaggio*, Milano, Electa, 1967), p. 81; Portoghesi, Paolo, *Disegni di Francesco Borromini*, Roma, De Luca editore, 1967, p. 12., Cat. n. 26.
- 39) ポッロミーニは、スパーダとともに、『オプス』の出版もまた試みた。図版部分はポッロミーニ、文章は、両者の意見を併せ、スパーダが担当した。Cfr. Borromini, Francesco (a cura di Joseph Connors) , *Opus Architectonicum*, Milano, Edizioni Il Polifilo, 1998 (スパーダによる草稿に基づき出版された)。ポッロミーニは、スパーダとの協働により、オラトリオ会にとって必要な条件や望ましい方向性を、より具体的に把握することができたと考えられる。
- 40) Alb. 285. Connors, *Borromini, op. cit.*, pp. 214-218, Cat. 39.
- 41) Connors, *ibidem*, pp. 200-203, Cat. 27. 図書館が南西方向に移される計画は、1638年夏である。Connors, *ibidem*, p. 220; Incisa della Rocchetta - Connors, *Documenti sul complesso borrominiano, op. cit.*, 1983, p. 44, nn. 115-116, 118.

- 42) Connors, *ibidem*, 1980, p. 49; pp. 220-223, Cat. 41.
- 43) *Opus*, 1725, Cap. XXVIII; Incisa della Rocchetta, “Un dialogo del P. Virgilio Spada ...”, *op. cit.*, 1967, pp. 192-193; Downes, *Borromini’s Book*, *op. cit.*, 2009, p. 128, Fig. 59.
- 44) 図書館の司書にとっても、この方法は便利である。なぜなら、外来者の退室時に、本の返却が確認できるようにすれば、司書は、以前のように、外来者に付き添う必要はなく、オラトリオ会士としての日常の務めや、図書館司書の他の仕事との両立が困難になることはないからである。*Opus*, 1725, Cap. XXVIII; Incisa della Rocchetta, *ibidem*, pp. 192. 部屋割りについては、注2に上掲したダウンズによる英訳と注解が理解しやすい: Downes, *Borromini’s Book*, *op. cit.*, 2009, pp. 126-133.
- 45) *Opus*, 1725, Cap. XXVIII.
- 46) *Ibidem*.
- 47) 注4を参照。サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネの計画は、1634年7月に居住棟から開始され、図書室もまた、この時に計画された。1635年2月から翌年6月にかけて、回廊が建設された。1638年3月に、教会堂に取りかかり、1641年に建立された。その後、建物のファサードの計画が開始されたが、教会堂のファサードは、ボッロミーニが担当したのは、1層目までであり、2層目は甥のベルナルドが完成させた。Montijano García, Juan María (a cura di), *San Carlo alle Quattro Fontane di Francesco Borromini: nella ‘Relatione della fabrica’ di fra Juan de San Buenaventura*, Milano, Edizioni il Polifilo, 1999, pp. 28-30.
- 48) 図書室は、最上階の4層目に配置された。Montijano García, *ibidem*, pp. 52, 55. ベルリン国立美術館の図書館に、当時ボッロミーニが描いた図書室の図面が所蔵されている。Staatliche Museen zu Berlin, Kunstbibliothek, inv. 1049. Portoghesi, *Francesco Borromini*, *op. cit.*, 1977, (1<sup>a</sup> 1967), p. 76; Connors, Joseph, “Un teorema sacro: San Carlo alle Quattro Fontane”, in *Il giovane Borromini* (a cura di Manuela Kahn-Rossi e Marco Francioli), Milano, Skira editore, 1999, (pp. 459-512), p. 482, Cat. n. 260.
- 49) ローマ大学学長のカルロ・カルターリ Carlo Cartari (1614-1691年)は、当時ボッロミーニが設計していた、ローマ大学のアレクサンドリーナ図書館の計画において、本棚などを整える参考とするために、ボッロミーニの同伴により、ローマの図書館を見学して廻った。サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ修道院の図書室は、そのうちの1つで、カルターリによる見学時の記録が残されている。Del Piazzo, Marcello, *Ragguali borrominiani*, Roma, Ministero dell’interno, Pubblicazioni degli Archivi Stato LXI, 1968, p. 231, c. 95.
- 50) *Opus*, 1725, Cap. XXVII.
- 51) *Ibidem*.
- 52) *Ibidem*; Downes, *Borromini’s Book*, *op. cit.*, 2009, p. 126. Incisa della Rocchetta, “Un dialogo del P. Virgilio Spada ...”, *op. cit.*, 1967, p. 186. においても、説教師の部屋が図書館に近い場所であり、同様な計画であったことが読み取れる。

#### 図版出典

Fig. 1: セバスティアノー・ジャンニーニ『オプス・アルキテクトニクム』ローマ (1725

年) tav. 2.

Fig. 2, Fig. 10, Fig. 11a, Fig. 11b: オラトリオ会のヴァッリチェッリアーナ図書館 ローマ  
筆写撮影

Fig. 3: Connors, Joseph, *Borromini and the Roman Oratory: Style and Society*, Cambridge, Mass., London, MIT Press, and New York, The Architectural History Foundation, 1980.

Fig. 4, Fig. 5, Fig. 6: Borromini, Francesco (a cura di Joseph Connors), *Opus Architectonicum*, Milano, Edizioni Il Polifilo, 1998.

Fig. 7a: Hempel, Eberhard, *Francesco Borromini*, Wien, Kunst Verlag Anton Schroll & Co., 1924.

Fig. 7b, Fig. 7c, Fig. 8: Graphische Sammlung, Albertina Museum, Wien によるマイクロフィルム

Fig. 9, Fig. 13: 『オプス・アルキテクトニクム』より、筆者作成

Fig. 12: Staatliche Museen zu Berlin, Kunstbibliothek, inv. 1049 (Online-Datenbank der Sammlungen).